

投稿

アイヌの月についての伝承
～その多様性を考える～

北尾浩一（星の伝承研究室）

1. はじめに

プレアデス星団の伝承に続いて、月の伝承の多様性について考える。2009年に平取町二風谷を訪問した際に記録した月についての伝承にこれまで本で読んでいた伝承と異なる点があり、調べていくと実に多様で豊かな伝承が語られていることがわかった。二風谷で、「月にうさぎがいるんだよ。うさぎに変えられちゃったのだよ」と聞いたとき、「かつて語られた多様で豊かな伝承をまとめておかなければならない、急ごう」と思ったものの、私の怠慢で2025年になってしまった。

月の中の人の伝承も、地域によって、語る人によって、さらには語るときによって、変化する。ひとりひとりの暮らしのなかで形成された伝承の多様性について考えていきたい。

2. 萱野志朗氏から聞いた話

2024年10月、萱野志朗氏（萱野茂二風谷アイヌ資料館館長、昭和33年生まれ）より月の中の人についての伝承を聞いた。（広橋勝氏、古屋昌美氏同行）

◆タイトル「からっぽやみ（トランネ[怠け者]）の少年」

ある少年が、水汲みに母親から言いつけられて、行くわけです。そして、いちばんはじめにイヌンペと言って、いろりのまわりにある炉縁（ろぶち）です。炉縁を水汲みに行く柄杓でたたいて、イヌンペはそこでねっころがっているだけでいいなあ。

次は柱イクシペをぽんぽんとたたいて、この柱はただ立ってるだけでいいなあ。

次に、どじょう、どじょうのことを「チチラ」というのですけれども、どじょうを見て

その口のほそいものと悪口いった。次にマスに会う。マスのことをサキペというのですよ。夏に食べるものという意味。マスは、身がやわらかいのです。その身のやわらかいマスみたいな、と悪口を言う。

次にサケに会う。サケともいいですけど、北海道ではだいたいシャケ。シャケ（サケ）に会ったら、サケはアイヌ語ではカムイチェプ。カムイチェプに向かってああ神の魚よとよびかけて。で、そのあと、どういうわけか月に連れていかれて。誰が連れて行ったか。

母親が息子を探しに行く。誰に聞いてもみんな悪口を言って教えてくれない。どじょうにきいても、教えてくれない。マスに聞いても身のやわらかいやつと悪口言ったから教えてくれない。ほんとうはやわらかくておいしいのですけれど。

鮭はカムイチェプと言われたから教えてくれる。悪態ついて、怠け者だから月に連れて行かれたんだ。怠け者の少年はいまでも天秤棒かついで月にいるんだよという話。実際に民話でそういう話したのです。

3. アシリレラ氏から聞いた話

3.1 2009年3月

あるとき、いろりのそばの子どもにおばあさんが言いました。

「水汲みを手伝ってくれ」

子どもはめんどくさがり、いうことをききません。

「ばあちゃんがマキを取って帰るまでに、水を汲んできなさい」

そう言って、おばあさんは、薪（まき）を取りに行きました。子どもは、イヌンペ（炉

縁、イロリのフチ)をたたいて言いました。

「おまえ(イヌンペ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかいな」

そして、足元の祭壇を立ったままあしげりして、水くみに行こうとしなかったのです。

クンネばあちゃん(クンネノチュ、シネブノチュ、一番星)の出る頃、子どもは、水おけを持って、「イロリの灰はここで何もしないでいいな」と、灰をつつきまわしました。それから、「水を汲まないと」と、桶(おけ)をふり、ピサック(柄杓)を持って、川に降りて行きました。しかし、子どもは、水を汲むのが嫌で川で遊んでいました。

おばあさんが家に帰ると、その小僧(子ども)がいません。おばあさんは、きっと水汲みに真面目に行ったのだろうと、川を降りていきました。ところが、子どもはいません。桶が1つ置いてありました。

おばあさんは、川の魚に、「アメマスさん、私の子どもを知りませんか」と尋ねます。すると、アメマスは、「あの怠け者は、(アメマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない」と、教えてくれません。

困ったおばあさんは、「どじょうさん、どこに行ったか」と尋ねると、「川のつるんつるん変な奴と言ったので教えない」と教えてくれません。

おばあさんは、海の近くまで歩いて、へとへとです。

「怠け者の子どもは、どこに行った。早く帰って！」

海の近くに行くと、サケがあがってきました。

「カムイチェブ(神の魚、サケ)さん、あなたは私の子どもを知ってるのではないか」

おばあさんが、サケにそう尋ねますと、カムイチェブ(サケ)は、「ぼくのことをカムイチェブ(神の魚)と、子どもが言ったので教えてあげるよ。空を見てごらん。あれ、お月

さんのなかに神さまに入れられちゃったよ。あのなかに持っていかれたんだろ。文句ばかり言ってるから、神さまが怒って、月へ連れて行っった。桶(おけ)を持った小僧が立ってるんだよ」

それからというものの、怠けてる子どもに、「お月さんが怒(おこ)って、あのなかに持っていくよ」と言うと、子どもは、言うことを聞くようになりました。

(アシリレラ氏(昭和21年生まれ)が平賀ヤオキ氏(富川)、アシリレラ氏の母「山道サキ氏」(明治44年生まれ、山の向こうの「むかわ町」出身)から聞いた話)

3.2 2024年10月

タイトル「お月さんにはいったなまけものの少年の話」(広橋勝氏、古屋昌美氏同行)

ある日のこと、おばあちゃんが山菜とりにいくのに、(その少年に)お留守番を頼んでいった。

その少年は退屈で、いろいろばたをたたいていたが、お水を汲んでおいてねと頼んでいった。

水を汲むって、いろいろばたの柱があるところをたたいて、「いいなあおまえはなにもしないで、ここにいて」と文句をいっぱい言ってたたたいた。いろいろばたをぼんぼん、いいなあおまえは火のそばでいいなあ、とたたいた。水を汲んでこないと何もつくれないし、て、桶を持ってピサック(柄杓)を持って玄関に立った。

玄関に立ったら、柱にめがけて、柱はいいなあ、柱はここで立っているだけだから、と文句をいっぱい言って。桶をもってでて川にいきました。

川に行ったら、ナマズがいて、魚がいて、ナマズの顔を見て、「おまえの顔はみっともない顔をして」と悪口を言って、どじょうにも文句言って。

おばあちゃん帰ってきて、孫はどこに行ったか、バケツがないから川のどこにいますって川に行って、「なまずさん、うちの孫を知りませんか」と。

なまずさん「知らない、自分のことをひどい顔だとか悪口を言ったから教えてあげない」

おばあさん「どじょうさん知らない？」

どじょう「知らない、自分のことぬるぬると言うから教えてあげない」

おばあさん「孫はそんなことを言ったのですか。どうしようかなあ、誰に聞けばよいのだろう」

そしたら、サケがあがってきた。サケは、こう言いました。

サケ「ぼくのことをね、カムイチェブとあの子は言ったんだよ。カムイチェブって言うてくれたから教えてあげるよ。あの子はね、水汲むのをなまけてね、あちこちにやつあたりして歩いてたから、神様が怒ってお月さまのなかにいれちゃったのよ」「お月さまのなかに、ピサックをもっておけを持っている子がいるでしょう。あなたの孫ですよ」

おばあさん「おおーなんということでしょうか、いじめるつもりで水汲みしなさいといったわけでない」

泣きながらおばあちゃんは家に戻って新しい水を汲んで料理をした。

おばあさんは、お月さま出るたびに手をあわせました。

4. 月の中の人の伝承の多様性

次の伝承事例をもとに伝承の多様性を考える。(表 1)

- ・昔婆が歌った歌[1] (事例 1)
- ・千歳市蘭越、今泉柴吉古老伝承[2] (事例 2)
- ・日高荷菜、平目カレピア姫 (おうな) 伝承[3] (事例 3)
- ・長万部村・司馬力弥翁伝承[4] (事例 4)

・アシリレラ氏 (昭和 21 年生まれ) 2009 年記録 (北尾) (事例 5)、2024 年記録 (北尾[広橋勝氏、古屋昌美氏同行]) (事例 6)

・萱野志朗氏 (昭和 33 年生まれ) 2024 年記録 (北尾 (広橋勝氏、古屋昌美氏同行)) (事例 7)

なお、末岡外美夫氏著『人間達のみた星座と伝承』には、上記の長万部の伝承に基づく「月の中の子供」が掲載されている。[5]

伝承の登場人物には二つのケースがある。

- ・娘 (事例 2)
- ・男の子 (童子[事例 1、3]、少年[事例 4、6、7]、男の子 (小僧) [事例 5])

千歳市蘭越の今泉柴吉古老伝承のみ娘であり、他は男の子であった。

次に、各段階の伝承を比較する。

4.1 炉

一例は、炉ぶちの前にある台木[事例 3]、その他は炉 (爐) ぶち (炉端) を、水を汲みにいかなくてもよいと叩く。

4.2 炉に続いて

次の四つのケースがある。

- ・柱をたたく (4 例) (事例 1、3、4、7)
- ・柱に手桶をぶっつけ (1 例) (事例 2)
- ・柱に立っているだけと文句を言う (1 例) (事例 6)
- ・柱以外 (いろりの灰は何もしないでいいな) (1 例) (事例 5)

4.3 男の子 (娘) を探しに川へ

共通点は、川へ行く点と子どもがいない点。

4.4 魚 1

最初に出会った魚は、各々の伝承事例で異なる。

- ・鯢 (アメノウオ) (事例 1)
- ・ウグイ (事例 4) (赤腹ウグイ[事例 2])

- ・イトウ（チライ）（事例 3）
- ・アメマス（事例 5） ・ナマズ（事例 6）
- ・どじょう（事例 7）

4.5 魚 2

二番目に出会った魚も、各々の伝承事例で異なる。

- ・鱒（マス）（事例 1、7）
- ・イトウ（事例 2） ・アメマス（事例 3、4）
- ・どじょう（事例 5、6）

4.6 魚 3

最後の魚の前に出会った魚があるのは、事例 1、2、3 のみである。

- ・うぐひ（事例 1） ・鱒（事例 2、3）

4.7 最後の魚

全ての事例が鮭（カムイチェブ）で、月の中にいることを教えた点で共通。

4.8 語られる魚の共通点と相違点

それぞれの事例の魚を順に記す。

事例 1 鮠（アメノウオ）、鱒、うぐひ、神魚（鮭のこと）

事例 2 赤腹ウグイ、いとう、鱒、鮭

事例 3 いとう（チライ）、あめます、ます、さけ（シペ）

事例 4 ウグイ、アメマス、鮭の子

事例 5 アメマス、どじょう、カムイチェブ（鮭）

事例 6 ナマズ、どじょう、カムイチェブ（サケ）

事例 7 どじょう、マス、カムイチェブ（シヤケ）

語られる魚についての共通点と相違点は次のようになる。

◆共通点

・前述のように、最後の魚は、全ての事例において鮭（カムイチェブ）である。

◆相違点

・最後の魚以外は、全ての事例において語られる魚は異なる。

・同じ語り手（事例 5、6）においても、語られるとき（2009 年と 2024 年）によって異なる。

・沙流川流域で暮らした語り手（事例 5、6、7）の場合、沙流川に生息する「どじょう」が登場する。

4.9 月の中の人になった経緯

月の中の人になった経緯についての共通点と相違点は次のようになる。

◆共通点

・月の中の人になった経緯を鮭（カムイチェブ）が教えてくれる。

◆相違点

・神様が怒って、あるいは神罰として（事例 1、3、5、6）。事例 3 は、月の神のところに立たされている。

・月の神が怒って（事例 4）

・月が連れて（さらって）行った（事例 2、7）

4.10 結果

事例 1、3、4、5 は、怠けると月に連れて行かれるよ、なまけてはいけないと子どもにわからせる教訓的な話（寓話）であった。事例 2、6、7 も明確に教訓と言っていないが、怠けると月に連れていかれることを子どもたちに伝えることができていた。

5. 樺太アイヌの伝承との比較

樺太アイヌの月の中の人についての伝承は、次の文献にもとづく。（表 2）

・樺太アイヌのオイナ（事例 1）[6]

・富浜（北尾注：樺太豊原支庁富浜（とみはま）村）木村チカマハ氏（事例 2）[7]

・樺太敷香郡（しすかぐん）泊岸村（とまりきしむら）新間（にいとい）アイヌ 森誠藏

氏（事例3）[8]

事例1には、結果2に続いて次のようになったと語られている。

・家の主人（神なる兄）は「私は神である。私はそなたの姉がほしいと思っていた。それゆえ桶とひしゃくを扱っていたあなたの姉を私の家（北尾注：月）に連れてきたのだ。ここで私たちは結婚し幸せに暮らしている。さあ娘を連れて行って結婚しなさい。少なくとも水汲みには困らないだろう」と言った。

樺太アイヌの場合、魚に子どもの行方を尋ねると伝承されていなかった。樺太アイヌの月の中の人についての伝承の共通点と相違点は次のようになる。（表3）

◆共通点

・主人公は男女両方。小さな子供ではない。
・行方を聞いたのは魚ではない。尋ねたのは火の神、植物（木）。

◆異なる点

・月の人と結婚した。木幣を捧げなかったので行方を言わない。今後は神祭を欠かさないという教訓。
・なぜ月の中に連れて行かれたかが十分語られていない。
・一方で、お月様を羨ましがって犬とともに月の中の人になったという違う型の物語も伝えられている。

6. おわりに

日本列島に生きる人びとの暮らしのなかで語り伝えた星名伝承を訪ねて歩いた。しかし、月に関する伝承の記録よりも星名の記録に重点を置いた。いまになって、もっと月の伝承を記録しておけばよかったと悔やんでいる。

本稿は、2024年8月17日に北海道伊達市にて開催された第8回考古天文学会議in北海道伊達市「アイヌの星文化をかんがえる」における発表「アイヌの月の伝承・宵の明星の星名伝承についてー南北星文化比較をめざし

て」の一部（アイヌ、樺太アイヌの月の伝承）をもとに大幅に加筆したものである。

月の中の人について語ってくださった萱野茂二風谷アイヌ資料館館長の萱野志朗氏、山道アイヌ語学校のアシリレラ氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。

文 献

- [1] 金田一京助（1936）『アイヌ叙事詩 ユーカラ』、岩波書店、pp.33-36.
- [2] 更科源藏（1963）『アイヌ民話集』、北書房、pp.184-185.
- [3] 久保寺逸彦（1972）『アイヌの昔話』（昔話研究資料叢書別巻）、三弥井書店、pp.110-112.
- [4] 知里真志保（1961）「アイヌの神謡二」『北海道大学北方文化研究報告 第十六輯』、北海道大学、pp.32-34.
- [5] 末岡外美夫（2009）『人間達（アイヌ）のみた星座と伝承』、pp.57 - 59.
- [6] 阪口諒（2019）「樺太アイヌのオイナ」『北海道民族学 第15号』、北海道民族学会、pp.35-44.
- [7] 知里真志保（1953）「樺太アイヌの神謡」『北海道大学北方文化研究報告 第八輯』、北海道大学、pp.214-215.
- [8] 名取武光（1943）「月と若水」『北の會報 第1巻第1号』、北方民族文化學會、pp.12-13.



北尾 浩一

（上の写真は、宮城県気仙沼市大島にて、比嘉義裕氏撮影）

表 1 月の中の人の伝承の比較 (アイヌ)

	金田一京助『ユエーカラ』事例1 サンタリノベイナー-月の中の 童子説話-	更科源藏『アイヌ民話集』事例2 なまけもの姿	久保幸逸『アイヌの昔話』事例3 月の中の人の起原	知里幸祐『アイヌの神話-折 りかえし』和イ・オイ・メルカ・オイ11 長万部村・司馬力弥翁 ^{しほりやんちあきな}	アシレラ氏 2009 年事例5 男の子(小僧)	アシレラ氏 2024年事例6 お月さんにはいったまま けもの少年の話	菅野志朗氏 2024年事例7 からっぽやみの少年
話者	不明 最後は音楽が歌った歌	千歳市蘭越・今泉柴吉古老伝承	日高南栄 平目カレヒア 壱伝承	長万部村・司馬力弥翁 ^{しほりやんちあきな}	母・山道サキ氏(昭和41年)畠	アシレラ氏(昭和21 年生まれ)	菅野志朗氏(昭和33 年生まれ)
主人公	童子(男の子)	娘	童子(ベヘカチ・ネ・クル)	少年	男の子(小僧)	少年	少年
炉	(彼)爐ぶちを叩き叩き、かべ云ひにけりー『羨しや、爐ぶちは、水を汲まず』	小刀で炉縁に傷をつけて、「お前は炉縁だから、年中背中あぶりがかりして遊んでいて、水汲みをしなくてよいわね…」	爐縁の前にある台木(イヌ・ベ、サウシ・ベ)を火箸で叩き、ついたりしなから「羨ましいな、あ、汝は台木だから水など汲まずにすむんだ。爐縁をついたり叩いたりしながら「羨ましいな、あ、汝は爐縁のことだから水など汲まずにすむんだ。」	小刀を出して炉を叩き叩き、「炉ぶちはいいな、神様だから水を汲まない」	イヌ・ベ(作縁、イロリのフチ)をたたいて、「おまえ(イヌ・ベ、イロリのフチ)はいいな。背中を火あぶりして、あたたかくな」	いろいろばたをぼんぼん、いいなあおまえは火のそばでいいな、あ、とたたいた。	いちばんはじめにイヌ・ベと言って、いろいろのまわりにある炉縁です。炉縁を水汲みに行く場所だいたい、イヌ・ベはそこでねっころがっているだけでいいなあ。
続いて	戸柱を叩き叩きー『羨しや、戸柱は、水を汲まず』	家の柱に手桶をぶつけながら、「お前も柱だから仕事をしなさいで…」	「入小屋(イヌ・ベ)が、戸の柱は羨ましいな、あ、水など汲まずにすむんだといっ、つついたり叩いたりしていた。	戸口の柱を叩き叩き、「いいな、あ、柱は水を汲まなくてもいい」	「イロリの灰はここでも何もしないでいいな」と、灰をつきまわしました。	玄関に立ったら、「柱はいいな、あ、柱はここですっているだけだからと文句を言った。	柱(イヌ・ベ)をぼんぼんとたたいて、この柱はただ立っているだけでいいなあ。
探しに川へ	川筋の道を我下りけり	川原の砂の上に履物だけがあって、どこにも姿が見えない	川端へ下りて行ったが、童の姿も影も見えなかった。川伝いに下って…	川へ行って見たら、少年も手桶どこへ行ったやら影も形も見えない。	子どもはいません。桶(おけ)が1つ置いてありました。	ばけつがないから川のとこにいとまで行って川で行って、なまずさん、うちの孫を知らせんか。	母親が息子を探しに川へ行く。誰にきいてもみんな悪口といって教えてくれない。
魚し/消息をたずねた答え	鯉(メダカ)はわれらは、童子がわれらを悪口して、「ぽっぽっやい! ぽっぽっやい!」とばや立てて行きたれは、腹立たる故、童子の行くへを、我等云ふまじ	赤穂グイの群れ「あの子は、オレたちのことを、骨だらけで食えない奴だといっ、て悪口をいうから、知っていらねえけれども、行先きを教えない」	いどう(チライ)の群/人間たちから、いつも大口め(ハラマサ)といわれれるのが、痛から教えてはやるまい	ウグイの群「少年はいつも俺たちをいじめて、おまえたちの口は、まるで尻の穴だ!と云つてのしつた。だから教えてなんかないやないや」	ア・メマス/あの意け者は、(ア・メマスのことを)斑点だらけの悪いやつというので教えない	ナマス/知らぬ、自分のことをひどい顔だとか悪口を言ったから教えてあげない	どじょう/どじょうにきいても、教えてくれない。

魚2/消 息をたず ねた答え	ます 鱈の群『童子はおれらを悪口 し、汚い體！』と云ひた る故、我等鰓が立つので童子 の行くへを、我等は云はし』	いどの群れ『お前たちは、おれたち を獲っても、肉のますい、ゆだといつて 木の枝にひっかけたらして、根柢にす るから、子供の行つた先きは教へなかり	あめます(ツリグシ)／班つ ぎ(オキシ・チシヨ)かたつときと いわれるのが、鰓から童 子の行つた所は教へまい』	アメマスの群『少年はつても俺たち をいじめて、やけどして、おまれにお まはそはそはすだらけののしつ た。鰓から教へてやらないや』	どじょう／川のつるん つるんで変な奴と言っ たので教へない』	どじょう／知らない、じぶ んのことぬるぬるとい うからおしえてあげない	マス/マスにきいても身のやわ らかい、やつと悪口言ったから教 えてくれない。ほんとは柔か くておいしいのですけれど。
魚3/消 息をたず ねた答え	うぐの群『童子は、我等を 悪口して、尖り口よ、尖り口よ、 と囁く。なる故我等鰓が立つな り』と云ひつゝ、我を過ぎ行け。	ます 鱈の群れ『お前たちは、おれが川 にのぼつたころは大事にするが、 老魚になると大事にならずで扱げ るから、教へてやるものか』	ますの群『肉腐れ(ニ・チカ)肉 腐れといわれるのが、鰓から 童子の行つた所は知はてまい るが教へまい』	なし	なし	なし	なし
さいごの 魚	神魚(鯉)のことの群『童子 に、我等が達ひしきに、 「神魚よ！神魚よ！」と我等に よびかけたり。おまけに ば、一分四角を我等告ぐべ し。水汲むことを厭ひ、鰓ぶ ちを打叩き、戸柱を打ち叩い たるその神群に、月神から 捕へられて今は月中の人に なれて居るなり』	鯉の群れ『お前たちはおれを大 事にして神魚(カムイ・チエフ)神魚 (カムイ・チエフ)といつて、骨まで粗 末しなやつら数えてやるが、お 前の鰓は水汲みにきてお月さん はいいな、何もしないで黙って ればよいが、おれは寂しいとど んだかんだと使われる、といつて お月さんを見てたので、お月さ んがなまけもののみせしめに、月 の中へさちつて行つたのだ』	さけ(さへ)の群／人間たち はいいつも、神魚(カムイ・チエ フ)は、神魚よと呼んでくれ るのが嬉しいので教へてあ げまい』「童子は神群か ら罰されて、手桶を持って 月の神(チュウツ・カムイ)のと ころで立たされて居るので すよ』	鯉の子の群／「少年は水汲 も俺たちを見ると、神魚の 子よ！金の魚よと云つてく れた。だからその行為を教 えてあげろ」「少年は水を汲 むのをなまけたので、月の 神が怒つて、少年を休ごと 捕えて、月の中に裸のまま 置いてあるよ』	カムイ・チエフ(サカ)／ぼのこ をカムイ・チエフ(神)の魚と、子 どもが言つたので教へてあげ るよ。空を見てごらん。あれ、 お月さんのなかに神さまに入 られちゃったよ。あのなかに 持つていぬれたんだ。文句 ばかり言つてから、神さまが 怒つて、月へ連れて行つた。桶 (おけ)を持つた小僧が立つて るんだよ』	カムイ・チエフ(サカ)／ぼのこ をカムイ・チエフ(神)の魚と、子 どもが言つたので教へてあげ るよ。空を見てごらん。あれ、 お月さんのなかに神さまに入 られちゃったよ。あのなかに 持つていぬれたんだ。文句 ばかり言つてから、神さまが 怒つて、月へ連れて行つた。桶 (おけ)を持つた小僧が立つて るんだよ』	カムイ・チエフ(シヤク)／鯉 はカムイ・チエフと言われた から教へてくれる。悪態つ いて、なまけものだから月 に連れて行かされたんだ。
結果	我見しに、げにも童子 は、月中の人となりて居 たり。されば、さんざん に涙を、われ落したり。ゆ めゆめ、仕事をな眠ひ そ、物をな毀らそ。教訓	母親が泣く泣く見ると、月の 中に手桶をもつた子供の姿 が見えた。	その言葉どうり童子は手桶 を提げて、月の中に立つて いた。これからの人間たち よ！これを教訓として忘れ るな。骨折を惜しんで ならないぞ。教訓	本当に少年は裸のまま月 の中に立ちつくしているの だった。だから、これから のこともらよ、ゆめゆめ水 汲みをいやがつてはなら ぬ。教訓	それからというもの の、怠ける子どもに、 「お月さんが怒つて、あ のなかに持つていく よ」と言うと、子どもは、 言うことを聞くようにな りました。教訓	お月さんといふことでは か、いじめるつもりで水汲みし なさいといつたわけでもない。な ぎはらお月さんは寂し 戻つて新しい水を汲んで料理 をしました。お月さま出るたび に手をあわせました。	なまけもの少年はいまで も天群(あまぐり)といふ月にい るんだよというはなし。

表 2 月の中の人の伝承の比較（樺太アイヌ）

	阪口語「樺太アイヌのオйна」 事例1	知里真志保「樺太アイヌの神謡」 話者富浜 木村チカマハ氏 事例2	名取武治「月と若水」 話者 新聞(こいとい)アイヌ 森崎蔵氏 事例3
タイトル	月の人(THE MAN IN THE MOON) (ヒウスツギ[Ainu Folk-Lore])	月の中の人[chux-aynu] (和田文治郎博士採集)	
主人公	私(弟)	ヤレスボの妹	水汲みに出た女
行為	私(弟)は姉に育てられた。毎日姉は水汲みに行った。姉は桶や柄杓をたたいた。	水を汲ませても料理をつくらせても怠けた。ある日ひどく小言を云ったら、ぶいと家を出たぎり戻らない。	手桶を提(さ)げてお月様はいいよなあ。あんなに可愛くないで静かにして居られる。姿はらわい北尾注:一人称は水汲みしたり、働いたり(ばらばら)と兼用がった。
搜索1	姉の帰りを三晩まつたが帰ってこなかった。私は火の爐神(おうしん)に「イナウ」を捧げ、姉について尋ねたが返事はなかった。	おとうか月半、ヤレスボは火の爐の姉の行方を探しお前は今まで一本の木幣(もくへい)北尾注:イナウも私に捧げずに、私は言わないよ。	なし
搜索2	家の神(チセアタンバカムイ)に「イナウ」を捧げ、姉について尋ねたが答えはなかった。	外へ出て暫所(へいじよ)の神にたのむと、やはり同じことを云ってことわった。	なし
搜索3	川辺に出て、川の神に尋ねたが何の知らせも得られなかった。	なし	なし
搜索4森1	私は頼にも行っていないイナウを作(り)エノマツの爐神(Exo)に尋ねたが爐神は知らなかった。	なし	なし
搜索4森2	トドマツ(Abres Veitch)に尋ねたが無駄だった。	なし	なし
搜索5森3	柳の底木の茂みの奥のどこへ行って尋ねた。爐神は「お月様の底木の茂みですが、おしやべりかので、教えてあげまいら。あまの姉は月に昇って行って、月の人と結婚したのですと言った。	山の藪(はぎ)はぎに出かけて行ってのんだ。藪に云には「俺はしやべりだから教えてやろ。お前の妹の行方が知りたければお月様を見てごらん」	なし
結果1	私(弟)は非常(ひじょう)に怒って家(うち)に帰(かえ)り、弟(にい)の矢(や)を持(も)って出(で)て、最初(はじめ)に黒(くろ)い羽(う)の矢(や)に白(しろ)い羽(う)の矢(や)を掲(か)けて両手(りょうて)で矢(や)の端(は)をつかんで雲(うみ)の間(ま)を抜(ぬ)けて空(そら)へ飛(と)びあがった。	木幣(もくへい)を削(けず)ったので神々(かみ)が怒(おこ)って妹(いもうと)の行方(ゆくえ)を教(し)えてくれた。その後の(の)後(のち)は木幣(もくへい)を削(けず)って神(かみ)を敬(や)う(けい)う(けい)がさない。	女の後ろについてゐた丈(だけ)と一緒に、お月様の中へ這入(はい)りつてしまったと云われる。
結果2	すると姉(あね)が現(あら)れた。姉(あね)は小さな女の子(おんなのこ)の手(て)を引(ひ)いて、だが、そのような女の子(おんなのこ)は見(み)たこと(こと)がなかった。姉(あね)は「弟(にい)、どうして怒(おこ)っているの？月の人の(ひと)のおかみ(かみ)でこの美(うつく)しい(うつく)しい少女(おんな)と結婚(けっこん)できるの(の)が分(わ)からないの？」と言(い)った。	知里真志保氏は、「お月さまはいいよなあ、あんなに可愛く(かたじけなく)に可愛(かわい)くないで居(ゐ)られる。私は水を汲(き)んだら…」と兼用(けんよう)がったので神(かみ)に罰(ば)せられて「後(のち)についていたと共(とも)に月中(げつちゆう)に捕(と)わられた」と説(い)われるのが本筋(ほんしん)に記(き)している。	今でも手桶(てづく)を提(さ)げた女(おんな)とお月様(おつきさま)の中(うち)に見える。